

月刊・ブルーアンカー

Blue Anchor



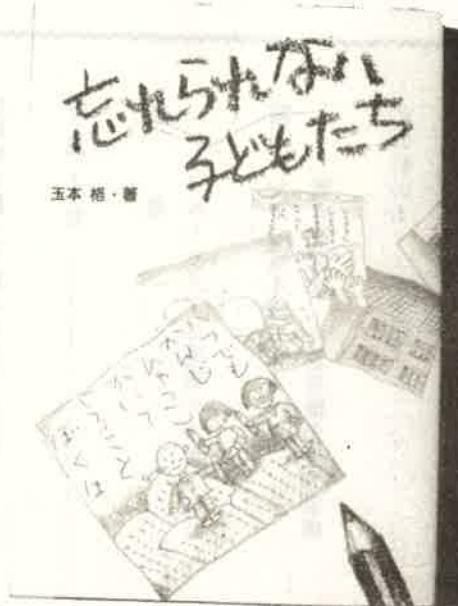
海文堂書店 1982・4【3】

〒650 神戸市中央区元町通3-5-10
(電) 078-331-6501

目 次

「忘れられない子どもたち」の周辺	玉本 格	2
安岡章太郎「質屋の女房」の質屋	植村達男	6
野鳥と私	加藤昌宏	8
偏見	秋元隆司	11
—ベストセラーの要素について—		
関西における啄木縁りの人々と	天野仁	13
啄木研究家 川並秀雄先生の業績	池田良穂	17
私の船の本		19
郷土誌の窓		22

「忘れられない子どもたち」の周辺



の学童集団疎開先発隊としての出発に始まる。国民学校初等科六年生の男児四十三名を連れ、鉄道沿線から約十四キロの医者もない寒村の民宿へ入った。

漢法薬の書物を頼りに、下痢は白花のゲンノショウコで、便秘はハブ草を煎じ、肺門淋巴腺炎は乾布摩擦と指圧で、寝小便はヤイトで、それぞれに効果があった。

翌年の三月、卒業のため子どもたちを連れて神戸に帰ってきた直後、三月十七日の大空襲で、校区も全焼であった。残留組の教師夫妻が爆弾の破片でそれぞれ心臓と頭に直撃を受けて逝くなつた。校舎内は避難の人々と死体収容所であった。その後始末をすませて、わたしはまた単身、つぎの六年生男児の待つ疎開地の宿舎へ出かけていった。それほど「戦争をただ勝ち抜くために」と犠牲的精神に燃えていたわけである。

二年目に入つて、食糧難はいよいよきびしく、イナゴ田にし・蚕のさなぎなどで飢えをしのがねばならなかつた。さらに、軍の命令によつて、航空機の燃料不足のために、骨と皮の栄養失調（五年生の宿舎の児童が一名急逝した）と空腹の子どもたちを松やに採集にかりたて

玉本 格

十九歳から六十歳まで、四十一年間の教師生活には、大きな山が五つほどある。その山の中に「忘れられない子ども」と、その周辺の子どもたちの顔がみえる。

第一の山は、一九四四年（昭和十九年）八月二十一日

始めたとき、ヒロシマ・ナガサキの原爆投下につづく八月十五日の敗戦であった。そして……

あとから知らされることは、いかに真実が隠され騙されつづけてきたことか。その騙されつづけていたことを、子どもたちに押しつけ騙してきたことのすまなさと、くやしさ。

わたしは子どもたちにあやまりたくて、一九四七年（昭和二十二年）新制中学校発足とともに、同じ小学校区をもつK中学校に転出した。そのころ、都市のすべてが難民状態の生活の中で、教科書もろくなかったところ、文部省の出した中学校用社会科教科書「あたらしい憲法のはなし」と高等学校用の「民主主義」は、平和と人間尊重を高く掲げて、忘れるのできぬすばらしい内容であった。

第二の山は、それから四年あまり経たとき、三歳になる次男をたつた半日の思いで逝くしたことである。あきらかに医師（軍医あがり）の誤診であった。生命の尊厳を直接に知られた。家内もノイローゼ気味となり、気分転換のため、幼い子どもたちのいる小学校へ転出させ

てもらつた。一九五二年（昭和二十七年）一月一日づけである。

その年、わたしは生活綴方教育の思想に出会つた。逝くなつた次男の形見のように、戦前の一九三〇年（昭和五年）ごろの地方性の生活綴方教育というものを、わたしは知らないかったのである。教師生活十五年も経た今になつて、①現実をみつめ、具体的的事実によって学ぶことの大切さがわかつた。また、②ひとりの喜びや悲しみを、自分たちなかまみんなの喜びや悲しみとするような集団づくりの方法。そしてさらに③何が真実であるか、なぜそうなのかという批評精神を育てるこの意義も学ぶことができた。

この思想は、以後二十五年に及ぶわたしの教師生活の中を一貫して流れ続けてきた思想である。子どもの背景にあるものをつかみ、子どものねがい、親のねがいをほんとうに受けとめるためには、「二〇坪の教室の中だけでは教育はできない」ということを教えられたのも、この生活綴方教育に出会つてからである。

第三の山は、小学校生活を四年あまり送つたとき、F

中学校の校長さんに口説かれて再び中学校に逆戻りしたことである。その理由は、「全校生徒二、〇〇〇名に、全員生活ノート（日記）を書かせているF中学校の教育をいかにするかを指導してほしい。」というのである。

わたしには重荷ではあったが、生活綴方教育は、むしろ中学校でこそしっかりと位置づけることの重要さを思い始めていたときであったので、引き受けることにした。すなわち「生活ノートをいかにして書かせるか」「どのような生活ノートを持たせるか」「日記に赤ペンを入れる方法は」「それらの日記を生徒全体のものに活用するにはどうするか」……などを、教師なまを増やしながら討議し、実践に移していく。

余談になるが、最近の中学校の校内暴力問題などを聞くにつけ、七年間のF中学校生活を振り返ってみて、言いたいことが二つある。その一つは「中学校の先生方、全校生徒に日記を書かせてほしい。そして、もっとも忘れられようとする生徒に、わが子に語りかけるように、いとおしさのあふれた赤ペンのコトバを書いてやってください。もう一つは「中学校の先生方、すすんで『障害』

をもった生徒をクラスの中に入れてやってください。共にふれあいをもたせるために。」ということである。

第四の大きな山は、夜間中学校に籍を置いて、べつたたちのいる「同和」地域の訪問教師となつたことである。敗戦後二〇年を経て、都市計画もすすみ、高度成長の波に乗って、高層建築がつぎつぎと建ち並ぶ中で、何の手も入れず放置された差別行政を目の前にして、わたしの怒りがこみあげる。「民主主義の根本精神は、人間の尊重ではなかつたのか。」これまでの自分の無知に対しても鉄槌を下された気持ちであった。

傾いた家々、窓もない戸板一枚の小屋に住む人々に、昼間も暗い裸電球が灯つていて。天井裏に住み、腹が減つて動けないという子どもの姿、排水口もない迷路と、共同便所と共同水道の密集地帯……。時の文部省初等中等課長をして「教育以前の問題だ」と言わしめた五〇〇メートル四方の被差別地帯。

この地域で二年間の訪問教師、そして同じ地域を校区にもつ中学校の教師として四年、この六年間に「民主主

義とは」「人間とは」「教師とは」という認識を根本から学ばせてもらったことに深く感謝したい。

もしも、この「同和教育」実践の体験がなかつたらば、第五の山である教師生活最後の四年間を「重いちはおくれの子どもたち」の養護学校で、すばらしい教師集団とともに歩んだ教育の発見と創造はなかつたであろう。

教育とは「ひとりひとりの子どものもつ可能性を実現するよう仕向けることである」「子どもにやる気を起させることである」「『脅す』ことではなく『励ます』ことである」ということ。また教師集団の相言葉になつていたつぎのようなことば

- ・コトバをこころに届かせよう
- ・からだとこころはひとつだ
- ・からだが拓（ひら）いて、こころが動く
- ・こころが拓いてからだが動く……
- このようなことを、ちえおくれの子どもたちから、最も多く教えられたことであった。

月 兎

重い ちえおくれの

子どもたちに
出会ってから

ばくには
月の中の兎が
みえるようになった。

そもそも、再び人間に生まれかわるものならば、わたしはもう一度、教師になりたい。教師になつてやり直してみたい。

安岡章太郎「質屋の女房」の質屋



のうちの一冊である。 小説の主人公「僕」の家の近くに私鉄T線の駅ができる、その傍に質屋ができた。それまでに「僕」は質屋通いの経験があった。「僕」の家のすぐ近くには別の質屋が既にあったが、母親が「僕」が質屋に行くことを嗅ぎつけるとまずいので、この自宅近くの質屋へは行かなかつた。ある日「僕」はT線の駅の傍の新しくできた方の質屋に行ってみる……。

「何か面白い本はないかな」と書店の文庫本の棚を、アチコチながめまわすことがある。安岡章太郎「海辺の光景」（昭和四〇年・新潮文庫）も、このようなときにみつけた本である。その後安岡章太郎の文庫本を二冊買つた。「質屋の女房」（昭和四一年・新潮文庫）は、そ

植村達男

「質屋の女房」は文庫本で僅か十二ページの短かいもので、大した筋があるわけでもなく、初めて訪れたときの「僕」と質屋の女房のやりとりから始まり、何度も通ううちに「僕」が出征した学生が質入れした芸書を質屋の庫の中で整理する話がつづく。最後は、「僕」にも召集令状が来て、出征する直前に質屋の女房が、かつて「僕」が質入れしたままにしていた外套を持って「僕」の家を訪ねてくるという話である。

「質屋の女房」を読んでから十年近く経た昨年のこと、安岡章太郎がかつて私の現住所と同じ東京・世田谷区代田に住んでいたことを思いだし、「自叙伝旅行」（昭和

四八年・角川文庫）を読んでみた。これによると、安岡家は昭和八年六月（安岡幸太郎は当時旧制中学一年）から、昭和二十年五月（空襲で焼失）まで、世田谷区代田二丁目九二三番地にあつたといふ。そして、「質屋の女房」は、その頃の話であるとしている。

「質屋の女房」と「自叙伝旅行」を読み合わせてみると、「質屋の女房」に出てくる質屋は多分世田谷区代田にあつたということになる。ところが、代田を通つている二つの私鉄は小田急線と井の頭線であり、「質屋の女房」に記述されているT線という名称と頭文字が一致しない。

そこで、更に一冊の文庫本が必要となつてくる。合葉博治・池田光雅「京王帝都」（昭和五六・保育社カラーブックス）があるのである。これによると、昭和八年一月十九日に、東京郊外電気鉄道株が帝都電鉄株と社名変更し、その年八月一日から渋谷・井の頭間（一二・一キロメートル）の営業を開始している。すなわち、現在の井の頭線は、かつては帝都線と呼ばれていたのである。そこで、「T線」は、現在の井の頭線ということになる。

野鳥と私



カイツブリとその巣

『神戸の野鳥観察記』(加藤昌宏著)より

いのは、幼少の頃の生活の環境や親のふるまいに大きく影響を受けたのだと信じている。虫をつまみ上げた子どもに悲鳴をあげる母親からは虫好きの子は育ちにくい。もう一つは他のものに興味が向くようにまわりの環境が仕組まれていたときであろう。

もともと虫や鳥が好きであった私に昆虫採集や鳥の話など今私の趣味の手ほどきをして下さったのが小学校一年生の担任の先生であった。日曜日や休みの日には捕虫網を持って虫取りによくつれて行ってもらつたものである。また、本を貸して頂いたこともあった。

戦争が始まつて、当時、小学校高学年であった私は、学童疎開という政策のため田舎の生活を余儀なくされた。その頃、田舎の学童の遊びはほとんどが自然相手であつた、季節を追つて草の実や木の実を集めは食べ、わなをかけて小鳥を捕らえ、その種類や数を競つた。毎日がそのような生活なので本来の虫・き・ち・鳥・き・ちにますます拍車がかかったのである。

田舎の生活は一年余りで再び神戸に帰つて来たが、幸にも裏がすぐ山だつたため、受験勉強などそっちのけ、

加藤 昌 宏

虫や鳥獸、さらに草や木、生きものが好きな人は人間本来の習性と思っている。幼児はまず動くものに関心を示す。大人になって虫や鳥に関心を示さなくなる人が多

夏休みや日曜はもとより毎日かばんをおくとすぐ山へとんで行く毎日であった。

ある日、仁部富之助氏の名著「野の鳥の生態」上中下三巻の新聞広告が私をひきつけた。野鳥の生活を調べているうちに感じた多くの疑問点を解決する適当な本が當時手に入らなかつた私にとってこの本は見逃すことができなかつた。すぐに書店に注文したが一冊380円の本は小遣いの範囲ではあまりにも大きな痛手であった。(昭和26年)。毎日、夜遅くまで何回読んだかわからない。文章を暗記してしまつた頁も少なくなかつた。この著者の考え方や態度は私の野鳥研究を大きく支えてくれた。今でもいろんな面にそれがあらわれるので感じている。

野鳥の研究はやはり自然が相手である。本から得た知識や人から聞いた話だけをふりまわすのはほんとうに鳥を知ったことはならない。本は多くを教えてくれるがすべてではない。自分で文を書いてみてそれがさらに明らかになつた。思つてることが紙面ではどうしても100%表現できないことである。私の未熟さのせいでもあるが、自然から教わることは偉大である。本の内容が自分

の研究と合致しないことも多かつた。研究者の観察の舞台となつた自然との違いも大きいからである。「野の鳥の生態」は東北での研究だから神戸とは差が多く、初めのうちは戸惑つたものである。しかし、それはよい刺激になつた。そのたびに解決にはさらに多くの野外観察が必要であることを知つた。本はよい刺激剤であったのである。基本的な知識を得るには多くの本を読まねばならない。が、それだけでは進歩はない。著者の考え方も参考になるが、自分としての考え方もほしい。それには、一日でも多く、一回でも多く野山に出て鳥に接しなければならない。そのたびに疑問は無限に生ずる。さらには、それが人を野山へ誘う。私のようなサラリーマンにとって余暇は日曜しかない。一年を周期としてめぐつてゐる自然だから一日の損失は一年の損失につながる。同じ季節は来年まで絶対にないからである。そう思えば無駄は一日たりとも絶対に許されない。私の生活はこれに支えられている。全休日は早朝から野山へ出る。次週はこれとこれを調べなければと気が張りつめて病気などしている暇はない。

最近特に残念に思うことは、野鳥のほんとうの姿が見られる原自然が神戸からだんだんと退却していることがある。町の中にも庭の片隅にも自然はあるのだが、限られた範囲の自然は本物ではない。そのため野鳥の研究にもずい分遠くまで行かなければならぬことが多くなつて来た。せまい国土に人間がひしめき合つてゐる日本だから無理もないが、それだからこそ、大都市の周辺に人手の入らない原自然をある程度残しておく必要を感じてゐる。精神的な面からだけでなく健康面から見ても広々とした人手の加わらない原自然は必要なのである。自然の森も切りはらつて人の勝手な植物だけを植えて緑化だの何だと叫んでみたところで自然とほど遠い緑はバランスのとれた安定した存在ではない。一時的な満足にしかならない。一度失われた自然は回復に百年単位の年月を必要とする。山を切る前に一度考えなおしてみる余裕はないものであろうか。

人の心は今このような自然を求めてゐるのではないかと思う。野鳥を見る会が催されたり、野草を観察する会があれば多くの人が参加する。さらに自然を科学的な面

から見る会だけではなく、文学的にとらえようとする会も盛況のようである。

偏見——ベストセラーの要素について——

秋元 隆司

ベストというのは、"最も"という意味だから、ある期間内では、一冊とか一曲しか存在しないものでなければならない。だから、二位から二十位くらいまでは、"ベター・セラー"と称するのが正しいのではないかと思つてゐる。しかし、こんなことを他人に言うと、十万冊以上も売れれば、"ベストセラー"という榮誉ある呼び方をすることが定着した今日では、屁理屈だと一蹴されるのがオチであろう。

この、どうでもいいようなことが頭に浮かぶのも、つまりは、本を何冊も書きながら（出版の運びとはなりながら）、いっこうに自分の書いた本がベター・セラーにならないという現実に、イライラしているからに違いない。「字句や呼称にこだわる暇があつたら、そろそろ、ベター・セラーとやらになるようなものでも書いたらど

うかねー」といった天の声が聞こえるたびに、今度の本こそは、と奮いたってペンを走らせてゐる。

だからといって、いつも漫然と筆をすすめてゐるわけではない。読む人の身になつて……とか、読者のニーズを先取りして……といった、本づくりの大前提やマーケティングの大原則には、十分留意しているつもりだし、よりよく売れる本を——という目標をはつきり指向してもいるのだが、どうも思うに任せないのである。

ベター・セラーを願望し、その要因について自分なりに思案をめぐらした結果、"よく売れる本"のファクターが、けつして単純なものではないことに気づいた。すなわち、つぎのような要素のいくつかが、同時にからみ合い、相乗効果をもたらしたとき、はじめて生みだされるのではないかという結論に達したのである。主題にも書いてゐるように、独断と偏見に満ちた"我説"であることをお断わりして、書き並べてみる。

①『内容』が講読欲を起させるようなものであること。

その時々の社会性が織り込まれている

読者のニーズに応えている

題名が読者の目をひきつける

目次が読者に興味を起させれる

他のものにないユニークさがある

②『出版社』がしっかりとすること。

出版社の知名度が比較的たかい

出版社・編集者に企画力がある

出版社の販売意欲が旺盛である

③『著者の知名度』がなるべく高いこと。

著者の顔が売れている（テレビ・新聞・雑誌などで）

著者の業績が顯著である（有名な賞などを獲得している）

評価の高い肩書きを持っている（教授・弁護士・議員など）

④

話題に富んだものであること。

マスコミに大きく取りあげられる

書評欄で激賞される

- 広告宣伝を大々的に行う
- 読者の目につきやすい所に陳列される

このように書き述べてみると、私にとって、ベストセラーはおろか、ベター・セラーやも、殆んど縁なきものだと、暗たんとした気持ちに襲われてしまう。よほど、幸運の女神、勝利の女神——いやもつともつと多くの女神達に微笑んでもらわなくては、ベター・セラーをものにすることなど、とうてい実現しそうにもない。しかし、いくら確率が低くても買わなければ宝くじの一等に当せんすることはできないのだから、たとえペンがすごく重くとも、〃なにかの間違い（とてつもない幸運）〃を期待して、原稿を書き続けていこうと、いつも自分自身に言い聞かせている次第である。

関西における啄木縁りの人々と

啄木研究家 川並秀雄先生の業蹟

天野 仁

石川啄木が存命ならば、今年は数えて九十七歳となる（二月二十日で満九十六年）。ところがわずか二十七歳（二十六年二ヶ月）の若さで、明治四十五年四月十三日に亡くなっているから、もう今年は七十周年忌を迎えることになる。従って啄木はいかに若い人生を燃焼させて、あのすばらしい作品を遺したのだったかと改めて痛感させられるものがある。

昨年は仏教的にいって七十回忌だというので、各地でさかんな啄木祭が行われたが、風の便りによると今年もまた全国で啄木追悼行事が、いろいろ企画されているようである。

かくいう私共の関西啄木懇話会でも、昨年に引続いて来る四月二十五日に大阪・森之宮の市立青少年センター

において「第一回啄木忌の集い」を予定しており、国崎望久太郎先生（立命館大学名誉教授）に講演をお願いしている。

ところで、東北の岩手県出身の啄木は、故郷を追われて北海道を飄泊した挙句上京し、苦闘四年病苦と生活苦にさいなまれた末東京で窮死したのだったから、遂に箱根を越えることなくその生涯を閉じたことになり、従つて残念ながらこの関西を訪れるることはなかった。

しかし、意外とその知友や連がりのあつた方々がおられたり、来られたりして、私共啄木愛好家に好意を示して下さり、また研究家の皆さん方にも便宜を与えて下さったのである。その中で兵庫県に限つてみても、三浦光子、丸谷喜市、内海信之、富田碎花、大島流人、吉岡イネといった方々がおられる。

三浦光子さんは、よく知られるように啄木にとってたった一人の妹さんであった。長年兵庫区楠谷町にあって愛隣館を経営し、聖公会の伝導師としてキリスト教の布教と、孤児の福祉、育成に努められた末、十三年前に昇天された。その著書『兄啄木の思い出』（昭和39年10月

東京・理論社発行)は啄木研究上欠かせない貴重な文献の一冊である。

啄木晩年の親友、丸谷喜市先生は東京高商専攻部(現一橋大学)の学生時代に、頻繁に往来し、「新しき明日」を志向する啄木と熱心に激論をたたかわされたというところである。丸谷先生はそれを謙虚に「啄木ゼミ」とおっしゃっていたが、啄木はその状況を「呼子と口笛」の中で「激論」という詩に格調高く詩い上げている。終戦後の神戸経済大学(現神戸大学)の学長を勧められたが、七年前に八十八歳で亡くなられた。啄木について最も語ることの少なかった旧友の一人だったが、私共は最も多くいろいろ教わったものである。

西播の竜野市で最も奥深い村に生まれ、終生そこから離れなかつた内海信之先生は、与謝野鉄幹の新詩社に啄木と相前後して入り、明治三十八年四月の雑誌「明星」では競争詩作「花散る日」が白秋・啄木と共にこの信之が当選して誌上を飾つたことは有名である。信之は日露戦争当時、数多くの反戦詩を詩つたが、それが昭和三十六年、詩集『硝煙』としてまとめられた。

「赤とんぼ」で有名な詩人三木露風(竜野町出身)は信之に兄事していたが、共に竜野市の名譽市民に選ばれた。

昭和四十三年、八十四歳で亡くなられた。

盛岡出身の詩人、富田碎花先生は、啄木と社会主義問題等を論じられた方であるが、啄木の知友の中で現在御存命なのは恐らくこの方以外にはないだろう。昨年「六甲」誌上に百首の短歌を発表されたのでお元気だと思つていたら、今日厚生年金病院で入院加療中と聞く。御本腹を祈るや切である。

大島経男は流人と号した人。明治四十年五月、石をもて追われるごとく故郷を出た啄木が、函館において雑誌「紅苜蓿」を通じて交流があり、啄木に大きな影響を与えた方である。当時の人たちの中で啄木は、この流人だけには終生「先生」と尊称をもつて敬意を表している。流人は不遇な人で、晩年神戸に来て日語学校で英語を教えたが、昭和十六年川並秀雄先生などに看取られて生涯を終えた。

吉岡イネさんは啄木の姪である。啄木の長姉田村さだ

さんの長女である。戦前に三浦光子さんを頼つて神戸に来られたが、前述の丸谷先生をモデルとした「激論」という詩を含む九篇の「はてしなき議論の後」の詩稿ノートを川並秀雄先生に贈られた方である。

○石川啄木新研究 昭和47年4月30日
○東京・冬樹社発行 三四六頁箱入二千円
(昭和51年3月25日補稿 二千五百円)
○啄木秘話 昭和54年10月10日

昭和四十七年十月、志方町の鶴林園から夫と共に盛岡の老人ホーム清和荘に移つて余生を愉しんでいたが、惜しくも一月二十四日老衰のため九十一歳で亡くなつた。

これら啄木縁りの方々とは昭和初期から交流されて來たのが、啄木研究では故吉田孤羊に次いで、六十年前から携つて來られた、関西での啄木研究の草分けである川並秀雄先生(西宮市松籟荘四一三八)である。

戦前、戦中の困難な時期に、何度も東北から北海道へと資料を求めて調査におもむかれた、その御苦労の集積が戦後、次のような啄木関係の研究文献として上梓しておられる。

○啄木晩年の社会思想 昭和22年6月30日

○啄木の作品と女性 昭和29年10月20日

東京・理想社発行

一九二頁 二百円

日本近代文学館理事長小田切進先生は「尽きない興味をかきたてる」と次のよき序文をよせて川並先生を讀えておられ

啄木について書かれた本は数多くあるが、本書は早くから啄木に傾倒し、長くその生活と文学の踏査、研究につとめてこられた川並秀雄氏のエッセイ集だ

けに、さすがに鋭い洞察にみち、尽きない興味をかきたてる。

これまで未発表のまま知られなかつた書簡など、新資料をも収録し、啄木像への新たな照射がなされていて、すこぶる示唆に富む書だ。

この本には十一のエッセイが収録されているが、その目次を紹介しておく。

目 次

序 「小田切 進」

啄木探究夜話

啄木の遺品と書簡

映画撮影と啄木の歌

—俳優西村晃と映画「マタギ」—

啄木短歌の作曲

小林多喜二と啄木

啄木と丸善

高安月郊と啄木

啄木と鈴木鼓村

未発表の啄木書簡

先生は常々、自分の啄木研究が、この兵庫県に居ることによって、県下におられる啄木縁りの前記の方々のおかげで続けて来られたことを感謝しておられる。

明治末年の閉塞された時代に、ひたすら「新しき明日」を志向しながら窮屈した啄木の遺産は、その後七十年を経てもなお、川並先生始め多くの研究家が輩出し、新しい愛好家が育つてきている。関西啄木懇話会ではその人達と共に、川並先生や、姫路で若い人達に啄木の精神を教えておられる内海信之の嗣子内海繁先生などの教えを受け継いで、更に積極的に学んで行きたいと希つているのである。（関西啄木懇話会代表）

その一 山本千三郎宛
その二 伊東圭一郎宛
その三 入沢涼月宛

鶴外と啄木詩評 —有明は泣堇にまさり、啄木は有明にまさる—

管野須賀子と平出修作「逆徒」

私と船の本

池田良穂

土佐沖の太平洋上を鹿児島に向かい南下するフェリー

“さんふらわあ¹¹”船上でこの原稿を書いている。

本職が大学での造船工学の研究と教育、趣味がまた船と、生活全体が船にうずもれた中で、たまの休暇もまた船に乗って旅に出かけている。

この“さんふらわあ¹¹”は、私にとって特に深い想い出がある。六年前、同船のブリッジで達船長の立合いのもとに太平洋上で結婚式をあげた。当時、フェリー業界

は不況に突入しつつあった。いくつかのフェリー会社が倒産しており、同船を運航する日本高速フェリーの業績もあまりかんばしくなかつた。そうした状況の中で、日本高速フェリーの方々は私達の結婚式のためにずいぶんいろいろしてくれた。その“さんふらわあ¹¹”にひさしうりに乗船したのである。さすがに、日本一の豪華フェ

リーと言われるだけに、日本のカーフェリーとしては異例なほどパブリック・スペースが広い。しかも、最近大改装して全体に明るい内装となり、旅客の入りも順調のことである。想い出の船だけに、いつまでも活躍して欲しいものである。

さて、前置きが長くなつたが、本誌上をお借りして、私と船の本との関わり合いについて簡単に述べてみたい。

北海道の港町室蘭に育ち、小供の頃から船の好きだった私は、中学生の頃から「世界の艦船」や「船の科学」等の雑誌を購入しており、それらの本で見知った船と港で実際に出会うととてもうれしかつたものである。

私に大きな影響を与えた本として、後に大学で直接教えていたただいた恩師池田勝先生（海文堂出版発行の沢山の著書がある）のいく冊かの本があつた。こうした船の本とのふれ合いの中で、船へのあこがれを育み、船の知識を増していく、ついには船を本業とすることにもなつた。室蘭も港町であつただけに、いくつかの本屋には海事専門書が比較的よくそつっていた。

大阪の大学の船舶工学科に入り、最初に聞いた書店名

が神戸の海文堂書店であり、この名を知らなければ造船のモグリと言われる程だった。海文堂で数多くの海や船の本と出会い、私の書棚にも船の本がギッシリとつまる様になった。

専門の造船工学を勉強するにあたっては、さすがに世界一の造船国だけあって沢山の海事専門書が発行されており、こまることはほとんどない。しかし、『趣味の船』の方では十分な書籍があるとは言えない。最近は、帆船の本と豪華客船の本がある程度そろう様になつたが、一般の船ファンが必要とする船に関する種々の情報を提供するにはいたっていない。これは、船ファンの層の薄いことに問題があるのはもちろんである。鉄道ファン、航空機ファンに比べると一ヶタ数が少いのは事実らしいが、反面そうした情報を提供する書籍、雑誌が少ない事が、船ファンの層を厚くする上で大きな障害となっているのも事実であろう。例えば、イギリスではいく冊かの月刊の商船雑誌が駅の売店でも売られており、いわゆる『シップラバー』も多い。

こうした状況を少しでも良くするべく、手作りの船の

本を出そと仲間で始めたのが、現在海文堂書店のコトナーにも並べていただいているブルーの表紙の自費出版本達である。一冊目の「日本の旅客船」は約六年前に発行したもので、日本中の内航客船を網羅的に紹介した写真集であり、二冊目の「さようならにっぽん丸」は長年南米航路の移民船として活躍した「あるぜんちな丸」の一生の記録を集めた本であった。三冊目は「小型客船28隻組」で、終戦直後混乱する国内輸送網を補うために建造された28隻の小型客船の活躍を記録したもの。四冊目の「世界のコンテナ船」、五冊目の「世界の大型フェリー」、六冊目の「世界の客船」は、それぞれの船種の百科事典としての役割を荷うべく発行したものであった。これらの自費出版本で、船に興味を持つ人は多少なりとも情報が得られるようになったと思っている。ただ、いずれもわずか500部の限定出版なので、価値がかなり一般書に比べて高いのが申し訳ないのだが。

それに加えて昨年から、「船と港」という小雑誌を『船ファンのための雑誌』と銘打つて発行を始め、これも九号を数えるに至っている。この雑誌は女房と2人で、

編集、タイプ打ちまでやっているもので、船旅ファン、船の写真マニア等々幅広い船ファンに少しでも多くの船に関する情報を伝えるべく出版しているものである。

素人の作る手作り雑誌ではあるが、船に対する私達の愛情だけは誌面からみとつていただけると思う。

以上のように、船の本を購入し楽しむだけでなく、現在は積極的に本を作るところまで来てしまつたが、船に対する興味はますます高まるばかりで、こればかりは死ぬまでおさまりそうにない。

(3月12日さんふらわあ11船上にて)

郷土誌の窓

姫路の中央出版から発行されていた「季刊・兵庫」が

昨年刊行中止となり、残念に思つていたところ、この二月に、傾向の違う新しい雑誌が登場した。ひょうご芸術文化センターが発行した「発言'82」という雑誌である。

この雑誌は、教育を一つのキーにしながら、現代の文化状況全般に、特にその右街道を進む現状に抗して、『生活者としての民衆』の位置から発言していくという認識のもとに創刊された総合誌である。書いている人たちは兵庫県内の人たちだが、『地域誌』という限定された範囲をこえて、文化総合誌として編集されているようだ。

『わたしの自分史』には、落合重信さん、福地幸造さん、藤野富子さんが原稿を寄せておられるし、『わたしたちの戦後』と題する座談会には、小島輝正さん、馬部貴司男さん、直原弘道さん、中西勝さん、須永克彦さん、石井亮一さんの名前が見える。日高六郎さんもこの創刊号に「しかし、もどかしさに居座つておられない」編集者

への手紙」を掲載しておられる。他にも多くの文化の現状に対する発言が掲載されるとともに、詩・短歌・俳句・小説も盛りこまれていて総合誌として充分な内容をもつた雑誌だ。年に一・三回の発行を予定していると、

「後記」ならぬ「編集会議」に書いてある。注目していただきたい。当店にて販売。八〇〇円。

発行所 ひょうご芸術文化センター

神戸市中央区中山手通 [REDACTED] 兵庫県教育会館内 TEL

* * *

郷土史の研究発表誌として地道に発行されてきた名著

出版刊の「歴史手帳」が一〇〇号を迎えた。今年の二月号がちょうど一〇〇号目で、特集は「郷土研究と私」と題して国内の地方史研究家・四十七名が文章を寄せておられる。この記念号には△歴史手帳創刊一〇〇号総目録△と△地方史研究雑誌総覧△が載っていて、地方史研究の上で共に重要なものだ。△雑誌総覧△には県内の雑誌が二十五誌紹介されている。詳細はこの雑誌を見ていただくとして、県内の地方研究誌の誌名だけをここに列挙し

ておくことにしよう。

＊県内の研究誌

淡路考古学研究会誌・淡路地方史研究会会誌・鹿児島・賀毛・季刊淡路の文化・季刊河・郷土文化・神戸史談・神戸の歴史・但馬史研究・辰馬考古資料館備室だより・兵庫史学・兵庫の部落解放史・武陽史考学研究紀要・地域研究いたみ・地域史研究・西宮文化協会月報・播磨の伝承と歴史・播磨路・兵庫県郷土研究・兵庫県の歴史・兵庫県立歴史博物館準学・みちしるべ・歴史と神戸

* * *

神戸市企画局が編集・発行する「神戸の歴史」の第6号が三月下旬に発行された。わずか二〇〇円という週刊誌並みの値段で質の高い神戸の歴史論文が読めるこの研究誌は読者の間で話題になっている。毎回神戸に関する「文献紹介」が載っているが、今回は二点。「兵庫方文書」(第二輯第一巻)「神戸市教育委員会編・三、〇〇〇円・入手可」と、「移民収容所概要」「昭和四年三月、移民収容所刊・入手不可」が紹介されている。

「神戸の歴史」(第6号)の内容は次の通り。

- | | |
|---|------|
| 明治初年の西代村 | 坂本敏夫 |
| 神戸と映画・芸能 | 改田博三 |
| 弁天浜物語 | 是常福治 |
| 建築関連行政史(四) | 福島富夫 |
| 他に、△座談会△で「神戸市衛生行政のあゆみ」、△研究ノート△に「ヒヨー・アンド・オーサカ・ヘラルド(三)」が掲載されている。「神戸の歴史」は当店にて販売。 | |

* * *

七年ぶりに「文芸淡路」が腹刊した。「文芸淡路」は昭和四十八年から一年間にわたって刊行されたが、その後長く休刊の状態にあった。このたび、当時同人だった洲本高校教諭北原文雄さんの呼びかけで十五名の人たちが参加して復刊の第一歩を記すことになった。

神戸新聞二月十八日の記事によると、再刊第一号はB5判で約百ページ。SFや連載小説、隨筆など十一編が寄せられたという。

* * *

神戸新聞出版センターから「播州後藤氏の栄光」(定期四、八〇〇円)という本が上梓された。姫路市立琴丘

高校教諭の松本多喜雄さんの労作である。副題は、後藤又兵衛基次の系譜という。実に、その書名の示す通り、これまで詳しく研究されることのなかった後藤氏の系譜について詳細に歴史をさかのぼって究明されたもので、

赤穂の地で赤松氏の研究を意欲的に続けておられる藤本哲氏の著書と並んで、郷土史研究者には注目の一書である。

海文堂案内版

四月末日まで開催いたします。ご期待ください。

★教育書ゾーンでは△保育図書フェア▽を開催中です。

たくさんの保育図書が所狭しと並んでいます。この機会に充実した書籍群の中からご入用の本をお選びください。

★文庫ゾーンでは、次のような版元企画によるブック・フェアを開催中です。

●二二五〇坪全面オープン

ようやく、法の規制も解かれて海文堂は全面オープンしました。『海のゾーン』△学習参考書ゾーン』、『理・工学書ゾーン』が加わって、総合書店として新しく船出しました。それぞれのゾーンには担当者がおりますのでお気軽に本をおたずねください。

★東入口前の「ブック・プラザ」では三月下旬から△入学おめでとうフェア▽を開催しています。小学校入学のプレゼントにふさわしい本を揃えてお待ちしております。

四月中旬までの予定です。

四月下旬からは、△乗らなくったって、だいじょうぶ△鉄路の旅・列車の世界▽を開催いたします。電車の本・旅の本・駅弁の本などを陳列します。

★ギャラリーでは、三月に計画していました△ヨーロッパ秀作版画展▽（ドイツARTES社より直輸入、新入荷版画）を都合により一ヶ月延期して四月十一日より、

▼早川文庫ノヴェルズ・フェア

▼栗本薰△フェア

▼講談社文庫森村誠一・夏樹静子ジョイント・フェア

▼角川文庫西村寿行フェア

▼新潮文庫・私の時間

★神戸の白井操さんの本『愛きらきらスイートキッキン・新婚編』、売り切れてご迷惑をおかけしました。増刷が届きました。手作りの料理の本です。料理書コーナーでご覧ください。

※ お詫びと訂正

「ブルーアンカー」（2号）に校正ミスがありましたのでお詫びして訂正いたします。

南諭造さんの「『諸橋・漢和』に詫びる話」は、「『諸橋・大漢和』に詫びる話」の間違いでした。

また、南さんの文章中、二ページの上段最終行から下段にかけての「私の愛蔵者」は「私の愛蔵書」の間違いでした。

慎んで訂正いたします。